

あとがき

この7月で瀧口修造先生が亡くなられてから丸4年になる。瀧口先生が亡くなられた月、7月に毎年先生を讃えて展覧会を催してきているが、今回は第3回目で加納光於さんにお願いした。ご覧のように194×390.9cmの大作を含む新作6点ならびに瀧口先生と加納さんとの詩画集「《稻妻捕り》Elements」(1978)の原画30点を中心に展示することになったが、ズッシリと手ごたえのあるオマージュ瀧口修造展を開催することができて大変うれしく思っている。

カタログのテキストは前回に引き続き巖谷國士さんにお願いし「運動」——旅人たち、をご寄稿いただいた。また大岡信さんの散文詩「時のふくらみ、闇のなぞなぞ——《稻妻捕り》のために」(1978)を再録させていただいた。おかげでこの展覧会、カタログは一層のふくらみと生彩あるものとなった。厚く感謝申し上げる。

思うに瀧口修造と加納光於との精神的な結び付き、関係は特別である。尋常ではない。このことは周知のところで、上記の大岡さんの散文詩、巖谷さんのテキストにもそのことはよく伺える。したがって、ぼくが屋上屋をかさねる必要はないのであるが、ひとこと申し述べておきたい。

加納さんはこの展覧会のタイトルを単に加納光於展とせずに、「加納光於——瀧口修造に沿って」とされたことについてである。加納さんが沿ってと言い切っておられるところに注目したいのである。作家は独立した個性的な存在である。と同時に、作家は常に誰かの影響下にある存在でもある。ただ、ダイレクトに影響を受けているのが見え見えというのではまずい。加納さんは極めて個性的で独自の比類ない世界を持つ作家である。その故にこの沿ってという言葉の意味は大きいのである。つまりこの言葉は単に影響を受けたという段階とは全く異なる次元、別言すれば瀧口修造と同次元の世界に加納光於が存在するということの証明にほかならないのである。加納光於がまさしくオマージュ瀧口修造展にもっともふさわしい作家の一人である所以である。

最後にこの展覧会開催にあたってご協力いただいた各位にお礼申し上げる次第である。

1983年6月7日

佐谷画廊
佐谷和彦